修学旅行唱歌

―大分・別府―

作詩作曲　羽柴　弘
資料提供　小寺須摩子（会員・佐伯市波越）
紹介者　臼井龍峰（賛助会員・佐伯市城下東町）

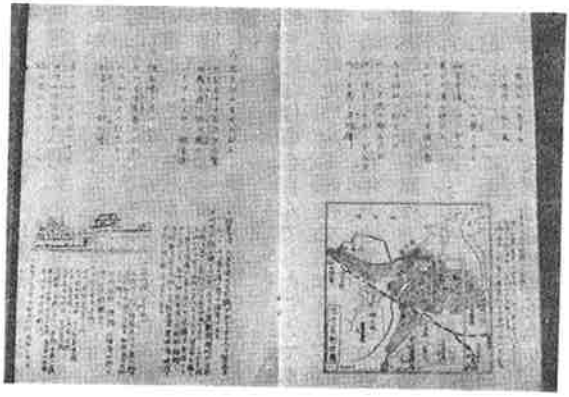
この歌は昭和六年三月下堅田尋常高等小学校六年生の大分・別府修学旅行に際して、担任されていた先生が作詩作曲されたものである。

この時の「旅のしおり」は、先生独得のきれいなガリ刷りで、この歌を中心として各頁毎に地図を入れ、絵を入れ、そして名所旧跡の説明がくわしく記述されている。

この時、先生は二十六才であった。

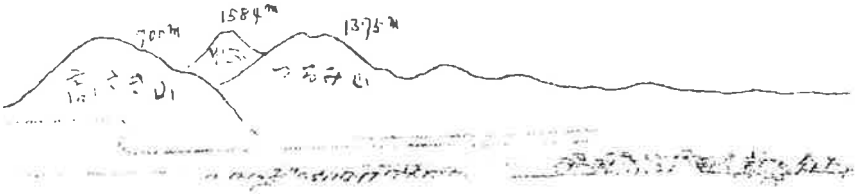
このプリントは当時の六年生小寺須摩子さんが保存されていられたものを、臼井龍峰氏が追悼文と共に紹介して下さったものである。

五十一年前の修学旅行のプリントを、よくも保存されておられたものだと驚くほかはない。勿論現存するものはこの一冊だけであろう。貴重な資料をよく保存していて下さったものだ。この歌が世にあらわれることができたのは、全く小寺さんのおかげである。感謝に堪えない。



小寺さんは、先生を大変敬慕されている教え子の一人で、ガリ刷りの『佐伯史談』の製本などには、よく他の教え子の人達と一緒に手伝いに来られていた。そんな小寺さんなればこそ大切に保存していられたのであろう。

（塩月）



其の一　（佐伯ー大分）

一、龍王山や堅田川
眼ざめもやらぬ朝まだき
いく山河にあこがれて
出で立つ旅のうれしさよ

二、汽笛一聲　佐伯驛
楽しき旅に出で立てば
見よや右手に窓ちかく
大入島も眼覺めたり

三、さ霧きえゆく海の上
浮ぶ白亞の工場に
めぐる文化の廻轉爐
やくやセメントおびただし

四、海崎驛も早やすぎて
去年の卯月の末のころ
漁貝ひろいてあそびたる
浅海井の浦なつかしや

五、走る列車の窓あけて
眺めは明し津久見湾
町はセメント空けぶり
黄金に匂ふ蜜柑山

六　臼杵の海の波しづか
沖にあゆらし津久見島
並ぶいらかのにぎはひや
海にのぞめる城の趾

七、熊崎下の江早やすぎて
トンネル出づれば幸崎や
煙突高し製煉所
関の港も程近し

八、打ち開けたる坂の市
大在すぎて程もなく
とどろく橋は大野川

源はるか、山幾重

九、流れを汲める鶴崎は
踊りなだかし夏の宵
高城驛に程ちかく
おはすは子安觀世音

一〇、ゆくてに高崎・由布・鶴見
かすむ山々ながめつつ
鐵路のきしり音高く
汽車はつきけり大分市

其の二（大分市）

一、ああ、大分市、新興の
商工業の賑はしや
延びゆく街は西東
人口五萬八千餘

二、名も美はしき白雉城
石垣高く塀白く
めぐらす堀の水やせて
しのぶ古城の面影や

三、英傑大友宗麟が
遺業の跡を訪ぬれば
上野ケ丘の春早み
ただ音高し松の風

四、つとに文化の華さきし
神宮寺浦いづこぞや
春日の浦の砂白く
よせてはかへす波の音

五、春日神社の杜かげに
やさしき鹿の群あれば
池のほとりにたゝずみて
仰ぐも高し忠魂碑

六、赤き心やますらおの
たむろするなり歩兵營

征戦三度、外つ國に
いさはかゞやく聯隊旗

七、練兵場の草のいろ
もゆる陽炎春のどか
かける兵士の影見えて
銃音たへじ射的場

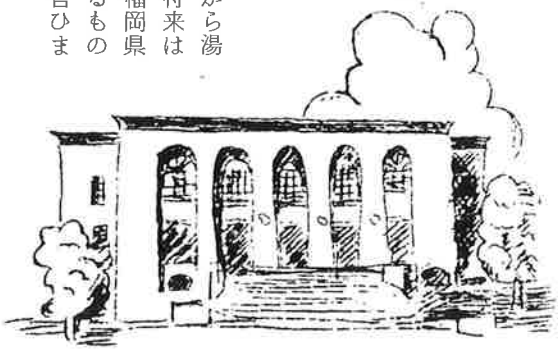
八、雪のユフタを血にそめし
田中大隊三百の
將士はねむるとこしへに
名はくちせじな志手ケ丘

九、今、九州の東岸の
門戸となりてひらけゆく
規模も大なり大分港
突堤はるか、海の上

一〇、日豊線のみちとほく
山また山の豊肥線

大湯線のつどひ来て
水路いそがし南北

△大湯線は大分市から湯の平に至りて、将来は日田町を経て、福岡県久留米市に達するもので、久大線とも言ひます。



其の三（別府）

一、海にせまるは高崎の
牛の臥したる姿かな
そびゆる山は鶴見岳
雪にかがやく由布の嶺

二、かがみの如し別府灣

瀬戸の内海水はるか
かすめる伊豫の山々や
また國東や日出の里

三、
かゞやくいらか湯の町は
山と水とに哺くまれ
出で湯に育ち恵まれて
名にそむかじな別天地

四、
海岸通り流川
また松原や浜脇や
街の通りの賑やかに
行き交ふ人の足しげし

五、
ケーブルカーに打ち乗りて
上る乙原、山の上
ながめは清しイタリヤの
ナポリにすらもおとらじな

六、
石垣原の古戦場
つはもの共の夢いづこ
實相寺山松黒く
姿うるはし扇山

七、
のぼる煙は海地獄
坊主地獄か血の池か
地獄めぐりの遠ければ
たゞたづね見ん鶴見園

八、
鶴見地獄の湯のたぎち
たぎる湯玉のものすごさ
地軸にひゞきとゞろきて
壯觀つきじたぐひなし

九、
地獄をあとに下りゆく
足のはこびのかろければ
たづねてゆくや大佛の
胎内めぐりゆるせかし

一〇、
砂湯のほとり宿とりて
夜のいこひのうれしさよ
夢路はたどる明日の旅
わがふるさとよ、まてしばし
（おはり）

注・カットは羽柴画
・原文のまま